

C 17

海外駐在経験者における糖尿病，高脂血症および肝疾患発症率の比較

日本女大家政 ○丸山千寿子 高見澤信恵

筑波大医

山下亀次郎

〔目的〕国際化社会の中で海外駐在経験を有する者が急増しているが、食物摂取と関係の深い疾病の発症と海外駐在地域との関わりについて検討することを目的とした。

〔方法〕1986年7月に、某大手商社の東京本社に所属する全男性社員2243名（平均年令40才10ヵ月）を対象として、糖尿病（DM）、高脂血症（HL）、肝疾患（B型肝炎を除く）（H）を有する者について、海外駐在経験の有無、駐在地、駐在期間、駐在回数、駐在開始年令、現年令、発症時期を調べた。また、対照として1987年2月現在の海外駐在者の駐在地を調べた。駐在地は、ヨーロッパ、ソ連および東欧、北米、中南米、中近東、アフリカ、アジア、オセアニアの8地域に分類した。

〔結果〕全男性社員のうち、DM 208名、HL 185名、H 149名であり、各疾患の発症率には差がなかった。ところが海外駐在中および駐在後に発症した者は、DM群43.3%、HL群63.2%、H群57.7%でHL群の発症率が高かった。一方、各疾患別の駐在のべ人数について発症時期を比較すると、H群は駐在中の発症が25.7%を占め、他に比べて高い発症率であった。これを地域別に比較すると、ヨーロッパではDM群（20.0%）とH群（25.0%）の駐在中発症率が高く、中南米はH群の駐在中発症率が45.5%と著しく高かった。駐在開始年令は各疾患間に差がなかった。現年令はDM群よりHL群が低く（ $p < 0.02$ ）、HL群の中では中近東駐在者、H群では中南米駐在経験者が最も低かった。このように、海外駐在地域により、各疾患の発症に差が認められた。